

平成 27 年 3 月 26 日

浜田市議会議長 原田 義則 様

議員名 西田 清久



調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため研修等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成 26 年 11 月 11 日～11 月 13 日

2. 視察先及び研修テーマ
 - (1) 徳島県名西郡神山町 NPO 法人グリーンバレー
研修テーマ 「サテライトオフィスの誘致」について

 - (2) 徳島県阿南市 阿南市役所
研修テーマ 「野球のまち推進課」事業について
「婚活応援係」の設置について

 - (3) 徳島県海部郡美波町 伊座利の未来を考える推進協議会
研修テーマ 「小さな漁村集落“伊座利”の取組」について

3. 参加者 小川稔宏 飛野弘二 笹田 卓 平石 誠
江角敏和 西田清久

4. 調査経費 ￥ 31,536 円



5. 調査研究活動の概要

(1) 徳島県名西郡神山町（神山町農村環境改善センター）

<視察に至った経緯>

徳島県神山町は、徳島市から約1時間、人口6000人余で高齢化率46%の過疎の町であるが、数年前には、転入者が転出者を上回っており、神山町に拠点“サテライトオフィス”を設ける企業も増えている。その背景にNPO法人グリーンバレー（大南信也理事長）の存在があり、今回、そのクリエイティブな田舎づくりの中身について視察研修をした。

<視察内容>

「サテライトオフィスの誘致」について

神山プロジェクト ～創造的過疎から考える地域の未来～

NPO法人グリーンバレー理事長 大南信也理事長の講義

- 創造的過疎とは、過疎化の現状を受入れ、外部から若者やクリエイティブな人材を誘致することで人口構成の健全化を図るとともに、多様な働き方を実現することでビジネス（仕事）の場としての価値を高め、農林業だけに依存しないバランスの取れた、持続可能な地域を目指す。
- 過疎地における課題は、雇用がないこと。仕事がないこと。
 - ・若者が古里へ帰って来られない。
 - ・移住者を呼び込めない。
 - ・後継人材が育たない。
- 神山プロジェクト
 - ①サテライトオフィス（場所を選ばない働き方が可能な企業の誘致）

羽田空港から徳島空港まで60分、徳島空港から神山町まで60分という地理的要件もあり、ITベンチャー企業など11社が、サテライトオフィス設置・本社移転・新会社設立などで誘致された。
 - ②ワークインレジデンス（仕事を持った移住者の誘致）

町の将来にとって、必要と思われる「働き手」「起業家」を逆指名して、商店街の空き家、空き店舗などを活用した起業を促し、町をトータルバランスでデザインする。
 - ③神山塾（職業訓練による後継人材の積極的な育成）

厚生労働省所管の事業で、6ヶ月間の求職者支援訓練を行う。
「独身女性」「20代後半～30代前半」「東京周辺出身」「クリエイター系」（デザイン、編集、カメラワーク）などに絞った人材育成を神山塾で行い、2012年12月に開始し、現在6期77名が終了している。そのうちの約半数が移住し、サテライトオフィスで10名雇用している。また9組のカップルも誕生している。

<感想>

大南信也理事長の講義には、私たちのほか、北海道、和歌山、大阪、兵庫、岡山、高知、出雲市などから百名以上の参加があった。

サテライトオフィスの現地視察に行くと、中山間地のこじんまりした町で、浜田市の中山間地と何ら変わりがなかったが、その中で11社が本社移転やサテライトオフィスを設置している理由は何なのか。単純に東京からのアクセスだけではなかった。住民目線のコンセプトから起業家、デザイナー、芸術家など創造性を持った人を集める手法に見事さを感じた。このような取組をしているグリーンバレーであるが、将来像（目的）は、4～5年後に日本有数のオーガニックフードのまちにすることだそうだ。

“ソフトが揃っているところに補助金が入ったら、150%以上の効果を発揮する”という言葉が印象に残った。



(2) 徳島県阿南市（阿南市役所・JA アグリあなんスタジアム）

<視察内容>

○「野球のまち推進課」事業について

（阿南市産業部 野球のまち推進監 田上重之氏）

2010年4月に全国初の「野球のまち推進課」を設置し、「野球をするなら阿南へ行こう！」をキャッチフレーズに“野球を資源とした地域戦略”を本格化し、野球と観光・地域文化を結び付けた「野球観光ツアー」、大学や高校野球部の合宿誘致、野球連盟や協会と連携し、西日本各地から参加する大会開催誘致と運営協力事業を展開している。また阿南に県外チームの集客を図り、地域のにぎわい創出と経済的活性化、県外強豪チームとの交流戦観戦の機会提供など、野球を通じたまちづくりへ市民意識の醸成

を図っている。

市民の協力として

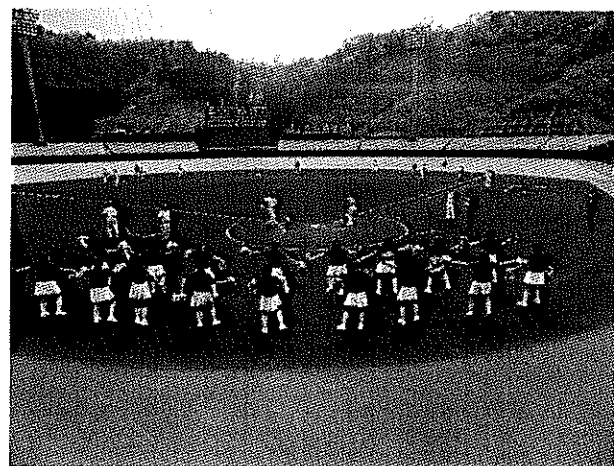
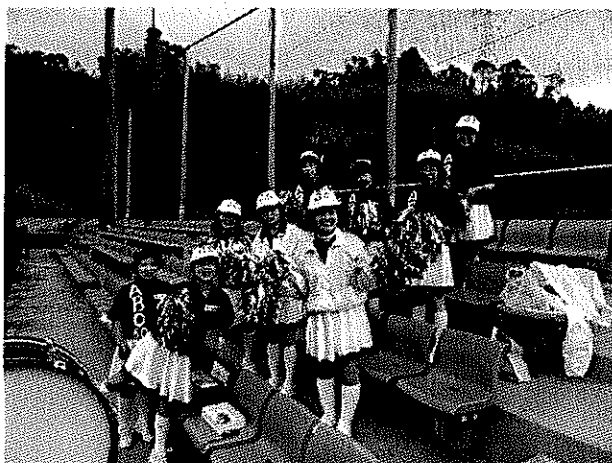
- ① **ABO60**（阿南ベースボールおばちゃん 60 歳以上）60 歳以上のチアリーディングによる応援団が選手を応援して盛り上げる。
- ② おもてなしチーム 野球観光ツアー時に県外チームとおもてなしの精神で対戦し、試合を盛り上げる。
- ③ ゆるキャラ「あなんくん」の着ぐるみを 3 人のグループがボランティアで作成し、市丹に贈った。
- ④ 大型トラックで **PR** 運送用のトラックの後部に「野球をするなら阿南へ行こう」の写真入りポスターを掲載し全国に **PR**。

この事業に対する予算は、平成 26 年度、約 1.300 万円、対して年間宿泊者数は約 3.000 人、経済効果は約 1 億円である。

昼食後は、実際の県外チームとおもてなしチームの対戦を見学した。

<感想>

スポーツ振興なら教育委員会の所管だが、阿南市は産業部において、外貨と交流の増加を目指している。特に市民との協働のまちづくりでは歯車がしっかりかみ合っていると感じた。ABO60には、阿南市議会議員も加わっていた。四国にはもともと“おせったい文化”が浸透しており、遠方から来た人々に対して心からおもてなしをされる。今回の視察研修ではそれを随所で感じた。また、野球のまち推進監、田上重之氏の言葉“夢を語らないと物語は始まらない！仕掛けをするのが役所の仕事” この仕掛け人の存在は大きい。



○「婚活応援係」の設置について

(阿南市市民部 ふるさと振興課 婚活応援係 大川康宏係長)

阿南市は、人口約 76,000 人、30,000 世帯で、安心して住める街ランキング全国 19 位、一人当たり市町村民所得が徳島県で 1 位である。

婚活とは、「就職活動」をもじった造語で結婚活動のこと、この「婚活応援係」設置の背景については、市長の公約の一つでもあるが、国税調査による全国や徳島県の未婚率の推移や“今の若者たちは何を思っているのか？”による民間アンケート調査の結果などから、独身の若者たちは意識が比較的自己中心的な傾向にあり、結婚するためには「結婚活動」が必要との認識から平成 24 年 4 月 1 日、ふるさと振興課に「婚活応援係」が新設された。

婚活応援係長としての取組は、

① 市職員による婚活応援隊の結成

平成 24 年 6 月 22 日、プロジェクトチーム「阿南市婚活応援隊」結成
(市職員の中から公募で集まった 20～33 歳の男性 6 人、女性 4 人)

② 婚活支援団体に“縁結び”を呼びかけ組織を強化！

市内で婚活支援に取り組んでいる団体

- ・阿南市農業後継者育成連絡協議会 しあわせネット ANAN
- ・阿南市社会福祉協議会結婚支援連絡協議会
- ・阿南市商工会議所青年部
- ・阿南青年会議所
- ・特定非営利法人出会いふれあい四国最東端
- ・阿南光のまちづくり実行委員会
- ・阿南市婚活応援隊

③ 婚活応援大使の任命

初代、(よしもとお笑いコンビ) 2 代目、ゆるキャラ“あななん”

④ イベントや講座の開催

男女 100 対 100 の大規模イベントや婚活応援大使に任命したよしもとの芸人プロデュースによる婚活パーティーのほか、市の科学センターを利用した星空恋活や野球を観戦しながらの恋活、離婚経験のある男女を対象としたパーティーなど趣向を凝らしたイベントを開催。

婚活事業の問題点

実際にカップルが成立してもプライバシー等の関係から、その後結婚に至ったかどうかまでの把握が難しい。しかし、単にカップル成立や結婚だけが目的でなく、家にこもりがちな若者たちの交流を深め、自分の住ん

でいる地域の良さを自覚するきっかけとなることも大きなねらいの一つ。

<感想>

少子高齢化や未婚、晩婚化は全国共通の問題であるが、現在の社会、生活環境の中での取組は、昔の「おせっかいおばちゃん」のように、単純なものではないと思った。若者たちを含め、意識が自己中心的になっている社会で、与えてもらう依存型の意識をどう変えていかれるかが、大きな課題の一つだと思った。その中で、阿南市の「阿南婚活応援隊」の結成の取組が大きなヒントに思う。婚活応援隊のメンバー同士が2年後に結婚したそう。他のために意識をおいて活動していく過程が、周りから見ていて魅力を感じることがある。幅広い連携を広げていくことと男女間のコミュニケーションを醸成していく取組が重要と感じた。

(3) 徳島県海部郡美波町（伊座利漁業協同組合）草野組合長

伊座利校校長 伊座利の未来を考える推進協議会副会長

<視察内容>

「小さな漁村集落“伊座利”の取組」について

小さな漁村集落“伊座利”は、徳島県の南部、太平洋に面する美波町の最東端に位置し、入り組んだ海岸線と三方を山に囲まれ人口百人余り、漁業が唯一の産業で地域社会と経済を支えている。学校は、同じ校舎で学ぶ辺地2級の小中併設校、通称“伊座利校”がある。ところが過疎、少子高齢化で児童生徒数が減少し、統廃合は時間の問題となったが、“学校が無くなれば地域はますます寂れる！”ことから“何とか出来んか”と地域で山村留学制度の提案などを行政におこなった。しかし、時が過ぎても行政からの反応が鈍い状態が続き、“このままでは伊座利校が無くなる！”「なんとかせな！」と行政支援を諦め地域全体で立ち上がった。

- ・ 一日漁村体験イベント「おいでよ海の学校へ」開催（H11.11.17）
（学校の灯火を消すな！を合言葉に伊座利校へ児童生徒の転校を呼びかける活動）県内外の親子（定数30名）が対象で、企画から運営まですべて住民の手づくり、これが親子連れで受け入れる漁村留学の始まりとなる。
- ・ 動いたことで鮮明に見えてきた課題への対応として赤ちゃんからお年寄りまで全住民で構成する「伊座利の未来を考える推進協議会」（H12. 4）を結成。
* キーワード 交流
* キャッチコピー なにもないけど、なにかある！

- ・ 活動にあたっての視点とポイントを明確にし、地域にある資源（ひと・もの）を活かす地域内情報発信活動と攻めの姿勢として積極的に都市部へ出向き情報を発信する。
- ・ 移住者の受け入れ方は、来てください、住んでくださいといった受け身の受け入れ方はせず、地域の一員となれる人（家族）を『面接』で決めている。“全て自己責任で生活できる人（家族）”が対象。
- ・ 伊座利流「漁村留学制度」
転校の条件：子どもだけでなく親も一緒に転入
転校の儀式：三者面談（地域住民代表、学校代表、転校希望家族）
- ・ 全国各地から転校してきた子供たちは、1～2年の短期間から定住希望まで、これまでに100人を超える。
- ・ 伊座利流「漁師希望者の受け入れ方」
伊座利で漁師になるための条件は、一人前の漁師になれるまでに最低でも3～5年かかることの自覚とその間は収入が無い覚悟。その自覚と覚悟を持った人を面接で受け入れる。
現在、移住定住している漁師は5名（内海女さん1名）
- ・ 海女さんたちや漁師のおばちゃんたちで運営する「イザリ Café」やお年寄りが主役のたまり場「田舎 de きゃばくら」など充実施設がある。

<感想>

事前情報から伊座利の人たちはどんな人たちなんだろうと興味を抱いていたが、伊座利漁業協同組合の組合長で、伊座利の未来を考える推進協議会の草野裕作氏との出会い方が、今回の視察の全てだった。伊座利漁協の2階の部屋で時間待ちをしていた時、後ろからいきなり“あんたたち市議員は事前勉強もろくにしないで、どうせ物見雄山の観光旅行で来たのだろ〜”と名前も名乗らずに出て行かれた。後で校長先生に伺うと、あの人は漁協の組合長の草野さんです。と、私が一番会いたかった方だった。

草野さん曰く、“神山町のグリーンバレー大南信也理事長たちはスマートでカッコいいまちづくりをされている。私たち伊座利は、どろくさいまちづくりをしている。でも、どちらも目指すところと考え方は一緒なんです。”

ちょうどこの日は、伊座利校の子どもたちが漁師体験で、漁師と一緒に伊勢海老漁（前日に仕掛けた刺し網）に船で出かけ、2時間後に帰ってきた。取れた伊勢海老二十数匹や魚などは、すべてその日の給食材料だ。女性の先生は、

野外の調理場で伊勢海老のさしみや鍋を一生懸命調理している。横で漁協の組合長が、“お～包丁さばきが上手になったな～、えー嫁になれるぞ～”と声をかけたり、子供たち、先生方、地域の方々が一つになって刺し網を直したりで、“なにもないけど、なにかある”日本人が忘れかけている大事なものがここにはたくさんある気がした。また行きたい！と強く思った。

